

国際英語の促進 II

—英語になった日本語—

惠 玲子

I. はじめに

世界中に日本製品が出回り、局所ではそれらが溢れていることを見聞きする。同時に日本人の企業家、旅行者、仕事で外国に滞在する人々等も溢れている。日本も経済大国になり、経済面ではかなり世界に影響力を持ってきているが実体のある品物でない精神面・文化面での影響力はどれほどあるのか。その一面を探るため、現在世界語と思われている英語にその影響力を調べる。本論は前論*の「国際英語の促進」の続きで、日本語がそのまま英語に吸収されて英語化した言葉を語彙の側面より調べる。また国際英語創造過程における日本の方法を考察する。

II. 調査方法

以下6冊の辞典より日本語を語源とするものを摘出する。選択にあたっては入手可能な1986年以後の最新版を選び、手作業でおこなった。

堀内克明・斉田一路・高田正純・Stuart B. Flexner『最新英語情報辞典 第2版』1986 小学館

Webster's Third New International Dictionary, 1986, A Merriam-Webster.
12000 WORD, 1986, A Merriam-Webster.

Longman Dictionary of the English Language, Fifth impression, 1988.

J. C. Wells, *Longman Pronunciation Dictionary*, 1990.

The American Heritage Dictionary, Second College Edition, 1991, Houghton Mifflin.

* 東京工芸大学女子短期大学部紀要 (1991)

図 1 英語を母語とする人と第 2 言語とする人の推定数

国	母語とする人	第 2 言語とする人 を含めた総人口
Anguilla	10,000-	10,000
Antigua-Barbuda	100,000	100,000
Australia	14,000,000	15,000,000-
Bahamas	250,000	250,000
Barbados	250,000+	250,000+
Belize	100,000+	150,000+
Bermuda	50,000+	50,000+
Botswana		1,000,000-
Burunei		200,000+
Cameroon		8,000,000+
Canada	17,000,000+	24,000,000+
Cook Islands		20,000-
Dominica	50,000+	100,000-
Ethiopia		32,200,000
Fiji		600,000+
Ghana		12,000,000
Gibraltar		30,000+
Great Britain	56,000,000+	57,000,000
Grenada	100,000+	100,000+
Guyana	900,000+	900,000
Hong Kong	?	6,000,000-
India	?	700,000,000+
Irish Republic	3,300,000	3,300,000
Jamaica	2,300,000	2,300,000
Kenya		17,000,000
Kiribati		60,000+
Lesotho		1,400,000
Liberia		2,000,000
Malaysia (East)		14,300,000
Malawi		6,400,000
Malta		350,000
Mauritius		1,000,000
Montserrat	15,000	15,000
Namibia		1,000,000
Nauru		80,000+
New Zealand	3,000,000	3,200,000
Pakistan	?	85,000,000+
Papua New Guinea	3,500,000	
Philippines		50,000,000
Senegambia		600,000
Seychelles		60,000

Sierra Leone		3,600,000
Singapore	?	2,500,000
Solomon Islands		200,000+
South Africa	2,000,000+	30,000,000
St. Kitts & Nevis	60,000	60,000
St. Lucia		100,000+
St. Vincent	100,000+	100,000+
Swaziland		600,000
Tanzania		18,500,000
Tonga		100,000+
Trinidad & Tobago	1,200,000	1,200,000
Tuvalu		80,000+
Uganda		13,000,000
United States	215,000,000	230,000,000+
USA territories, Pacific		300,000-
Vanuatu		100,000
Western Samoa		150,000+
Zambia		6,000,000
Zimbabwe	200,000+	7,600,000
various British territories	30,000+	30,000+
TOTALS	316,015,000+	1,336,845,000+

III. 国際標準英語の誕生を仮定して

1) 現在世界で英語を話す人口

世界の人口は、国連の調査⁽¹⁾ (1988) によると約 51 億でそのうち英語の話し手は 17 億から 20 億に上るといわれる。英語を、「母語」とする人々は約 3 億少々である。第三世界のなかには英語を「第 2 言語」とする国々が多く、その数は約 10 億を超える。さらに英語を第 2 言語ではなく国際コミュニケーションの道具として使用している外国人は約 4 億から 7 億という推になる。

図-1 参考⁽²⁾

2) 多様性の英語 母語英語と New Englishes

英語を母語とする地域の英語を観察するとそれぞれ国、地域に応じて様々な英語の方言が存在する。さらに「第 2 言語」としている人々が、英語を公用語として、政治、ビジネス、教育、法律、メディア等に独自の国情、目的に合わせて「新英語」(New Englishes) を創造して広範囲に用いている。また

(1)「世界人口年鑑」国際連合 1988

(2) Crystal, David (1985) 「アジアの英語」 p. 2-3



図 2 世界の英国の輪

英語を外国語とする人々の母語に影響を受けた英語方言もある。これも New Englishes の一部であり、英語から発生した変種である。図-2⁽³⁾ 参考

a) アジアの英語

青山学院大学の本名信行教授は社会言語学の立場からノンネイティブ・スピーカー・イングリッシュの正当性を紹介している。その内容は次のようである。正当性を主張する議論は4つあり、それらは、(1) 英語の国際化、(2) 英語の多様化、(3) 英語が旧英米植民地において国内コミュニケーションの道具になったこと、(4) 英語が同国のアイデンティティを示すようになったこと、である。各地で New Englishes が独自の言語と文化に影響を受けて目的に応

(3) McArthur (1987) 「アジアの英語」 p. 4

じた英語としてできてくる。その結果、英語の変種の差異が大きくなれば、理解不可能である。しかし、変種の比較調査結果から差異よりも共通項のほうがずっと多いと教授は言われる。そして、アジアの英語の具体的事例としてシンガポールの英語を提供している。これは日本人の英語学習者にもよく問題となる箇所なので今後国際英語を修正、簡素化してゆく方法として参考ともなると思えるので引用する。

「シンガポールでは、英語を第2言語として民族間統一、あるいは民族間コミュニケーションの道具として利用する第3世界の他の国々と同じように、英語が3種類のパターンに大別される。それらは、上位語 (acrolect), 中位語 (mesolect), 下位語 (basilect) と呼ばれる。この区分は、英語が使用される生活領域を基礎にしてなされる。

上位語は、行政、立法、司法、外交、宗教、教育のような、フォーマルで高い生活次元と感じられる場面で使われる英語のパターンである。下位語は、ショッピングや雑談のように、インフォーマルで低い生活次元と思われる場面で使われる英語である。中位語はその間の部分で使われるパターンである。」

次にその文法的特徴を教授の説明より抜粋する。上位語

シンガポール英語と標準イギリス英語の文法上の差異はほとんどみられない。

I am looking forward to see you. シンガポール I am looking forward to seeing you. 英国語

中位語

1) 間接疑問文内の主語-述語の語順

May I ask where is the stamp counter?

May I ask where the stamp counter is?

2) 進行形の使用

I'm running an electrical shop.

I run an electrical shop.

3) 不定冠詞の脱落

May I apply for car license?

May I apply for a car license?

4) 名詞複数形の無表記

One of the lecturer told me to see you.

One of the lecturers told me to see you.

5) 動詞の無表記

He always go there every sunday.

He always goes there every Sunday.

下位語

1) 付加疑問は is it?

She is from Japan, is it?

She is from Japan, isn't she?

You're teaching us today, is it?

You're teaching us today, aren't you?

2) 疑問文で do の省略

What you want?

3) 関係詞 what の移動過程

I fill in exactly the man told me what to fill in.

I fill(ed)in exactly what the man told me to fill in.

4) 過去形として過去分詞

We gone last night.

We went last night.

5) 動詞句

Would you mind take me go?

Would you mind taking me to go?

6) 数の一致

All this are wrong.

All these are wrong.

7) can と cannot の独立使用

"Can I keep it?" "Can."

"You read Chinese, can or not?" "Cannot"

8) 述語の独立使用

"Is he angry with me?" "Angry."

Are you hungry?" "Hungry."

9) 目的語の省略

Can I renew?

10) be 動詞の脱落

His teaching not so good.

11) will の未来副詞化

That will depends.

12) マレー語終助詞の出現

Hurry up *la*.

以上がシンガポール英語の用例で、第3世界のいたる地域で見られるとしている。彼らはネイティブ・スピーカーの英語の「核」となる部分—(英語に組込まれている人間言語の普遍的な側面)—を採用しながら、「外周」の部分—(英語のみに備っている特異な側面)—を独自の方法で取捨選択したのである。

最後に教授は、日本における「国際英語」の議論は「機能」論が多く「構造」論が少ないことを指摘している。この形式を構築するにあたり第3世界のノンネイティブ・スピーカーが獲得した英語のパターンに鍵があるのではないかと示唆している。

IV. 英語化した日本語のリスト

A	hibachi
aikido	hirado-ware 陶器
B	hiragana
banzai	I
bonsai	ikebana
bon-seki	J
bonze 坊主	judo
Bunraku	jujitsu
D	K
dan 段	Kabuki
F	kakemono
futon	kamikaze 名詞, 形容詞
G	kana
geisha	kanji
genro 元老	karaoke
ginkgo 銀杏	karate
H	karateist
haikai	karatsu ware 陶器
haiku	kata 形, 型
harakiri/harry-carry	katakana

kanban/canban カンバン方式

Kawasaki's disease

kaya 茅

kendo

kimono

koan 禪

koto

kutani/kutani ware 陶器

M

mikado 帝

Minamata/minamata disease

mitomycin 薬品

moxa モグサ

N

netsuke 根付

Nipponese

Nisei/nisei

Noh 能

O

obi

origami

S

sake

samurai

sashimi

satori 禪

shiatsu

Shinto 名詞, 形容詞

Shintoism

Shintoist

Shintostic

shogun

shogunate

soy/soya 醤油

sukiyaki

sumo

sushi

T

tanka

tatami

tempura

teriyaki

tofu

torii

tsunami

tsutsugamushi/tsutsugamushi
disease

Tycoon 大君

U

ukiyo-e/ukiyo-ye

urushiol 漆

Y

yen

Z

zaibatsu

Zen

英英辞典に載った地理的名称

A

Ageo

Akashi

Akita 地名と犬

Amami

Asama 火山

Ashikaga
Aso/Asosan
Atsugi
Awaji/Awajishima
B
Beppu/Beppu Bay
C
Chiba
Chigasaki
F
Fuji/Fujiyama/Fujisan
Fukui
Fukuoka
Fukushima
Fukuyama
Funabashi
G
Ginza
H
Hadano
Hakodate
Hamamatsu
Higashi-Osaka
Hiratsuka
Hiroshima
Hitachi
Hokkaido
I
Ichikawa
Ichinomiya
Ikeda
Imabari
Ise 湾
Isesaki

Ishinomaki
Itami
Itsukushima
Iwaki
Iwakuni
Iwo Jima 火山, 戦争
Izumi
K
Kakogawa
Kamakura
Kanazawa
Kawagoe
Kawaguchi
Kawanishi
Kawasaki
Kiryu
Kisarazu
Kishiwada
Kobe
Kochi
Kofu
Koganei
Komaki
Kure
Kyoto
Kyushu
M
Machida
Matsudo
Matsue
Matsumoto
Matsuyama
N
Nagano

Nagaoka	Shimonoseki
Nagasaki/Nagasaki Bay	Shinano 川
Nagoya	Shizuoka
Naha	T
Nara	Tachikawa
Narashino	Takamatsu
Nihon	Takaoka
Niigata	Takarazuka
Niihama	Takasaki
Niiza	Takatsuki
Nikko	Tokara 島
Nippon	Tokorozawa
Nishinomiya	Tokushima
O	Tokyo/Tokyo Bay
Oita	Tomakomai
Okayama	Toyama/Toyama Bay
Okazaki	Toyohashi
Okinawa	Toyonaka
Omiya	ToyotaTsugaru 海峡
Osaka/Osaka Bay	Tsushima 島
Otaru	U
Otsu	Ube
R	Uji
Ryukyu	Urawa
S	Utsunomiya
Saga	Y
Sagami Sea	Yamagata
Sagamihara	Yamato
Sakai	Yokohama
Sakishima	Yokosuka
Sayama	Yonago
Sendai	
Shikoku	
Shimizu	

商標

Fujitsu	Nissan
Honda	Sanyo
Matsui	Sony
Matsushita	Sumitomo
Mazda	Suzuki
Minolta	Toshiba
Mita	Toyota
Mitsubishi	Typhoon
Nikkei	Yamaha
Nikon	

英英辞典に載る日本人名

Hiroshige Ando	画家
Hokusai	//
Kawabata, Yasunari	作家, ノーベル賞
Kurusu, Sabro	外交官
Matsuoka, Yosuke	政治家
Mutsuhito	明治天皇
Noguch, Hideo	細菌学
Nomura, Kichisaburo	外交官, 海軍士官
Ozawa, Seiji	指揮者
Sato, Naotake	外交官
Sato, Eisaku	政治家, ノーベル賞
Togo, Heihachiro	海軍大将
Togo, Shigenori	外交官, 政治家
Tomonaga, Shinichiro	物理学, ノーベル賞
Yamagata, Aritomo	政治家
Yamamoto, Isoroku	海軍士官
Yamashita, Tomoyuki	陸軍大将
Yoshihito	昭和天皇
Yukawa, Hideki	物理学, ノーベル賞

V. 結果と考察

以上が6冊の辞典より摘出した英語化した日本語である。但、人名、地理的名称の大部分は疑問の余地はある。手作業のため見落している箇所もあるかもしれないが、今回の摘出総語数は240語。その内、地理名が124語、人名が19語、商標が19語でのこりが、78語となった。

米国コロンビア大学のパッシン教授は次のように述べている。ある固有名詞は、人間の特定の姿や状態を想像させ、一つの国の性格やその物の代名詞までなることがある。イメージはそれぞれ人間の経験によって形成されるので、経験の深さまた関心の違いによって変化してくる。外国人が、日本に何を連想するかを調べる一つの方法は、その国に取入れられた日本語を点検することだと指摘している。教授の想像では英語化した日本語はせいぜい100程度であろうと言う。しかし、日本を表すシンボル、日本美術の由来、文学、思想、そのほか宗教的、文化的な用語となると、英語への浸透はほぼ皆無に近いと言う。一般のアメリカ人は日本の総理大臣の名前も歴史上の人物の名も、おそらくトージョー以外はほとんど知らないだろうと言う。

確かに教授の予想どおり、英語化した日本語は数少ないが、世界的に知れた地名、商標、人名を入れれば、かるく100は越すであろう。これらの多くは西洋人が興味をもって自国に紹介したり、日本人も一生懸命西洋に披露した結果である。つまり日本から発信したものである。ほとんどの語彙は日本文化・生活に関したまたは伝統的精神をシンボル化した用語である。またパッシン教授は、商標で世界の大衆文化に浸透したのは、ホンダとニコン（ナイコン）ぐらいであろうとし、その他は専門分野に限定される。例えばカメラ業界のブランド名だとか、ファッション界のブランド名といったような。

今回、英米の辞典で地名、人名、商標、その他の語彙を照しあわせながら調べたのであるが、それらの用語が多いのは米国のものであった。これは日本と米国の親密な関係の反映結果であろう。さらに移民で構成される米国の姿勢が異文化のものを受入れる寛容な精神に富んでいるからであろう。

American Heritage に載った地名はあまりにも多すぎ、すべてが国際的とは思えないが、選択基準には人口が10万以上の都市を上げているようである。また日本の特色ある山、都市として、あるいは歴史的、学術的対象の観点からとか実利的精神よりビジネス・チャンスからとも考えられる。人名では、日本を象徴する天皇や、明治時代の戦争に関係した外交官、軍人が多かった。そして、世界的に認められたノーベル賞受賞者である。

朝日新聞⁽⁴⁾に借用語の記事が載った。元奈良大学教授の英文学者、山岸直勇氏によると日本語が英語として定着した借用語の総数は「ランダムハウス英語辞典、第二版」(78年刊)で241語「オックスフォード英語辞典、第二版」(89年刊)は378語で、辞書に未採用の分まで含めると900前後になるとのことである。またテキサス州A & M大学の言語学者ガーランド・キャノン氏によると英語になった借用語の原語の順位はフランス語、ギリシャ語、ラテン語、スペイン語そして第五位が日本語だと言う。ただし「日本でしか通用しない点を考慮すれば、異例の借用率」とも言い、言葉の貸し借りを通して、日米両国が文化的に徐々に融合してゆく兆しを感じると言われる。

ここで論点を Japanese English に移行する。摂南大学の中山行弘教授は Japanese English⁽⁵⁾ についての各学者のテーゼを調べ、それらを次のように要約している。

「英語には、イギリス人やアメリカ人の民族語としての側面と、コミュニケーションを目的とする国際語としての側面とが共存している。後者の立場に立てば、各地域における英語は、それぞれの存在価値をもった、優劣のない異種なのである(筧)。つまり、つくるものとして、又、つくられつつあるものとして(鶴見)英語を捉えなければならないのである。この意味において、日本式英語であってもよい(國弘)というのは当然であり、又、わかりやすい日本人訛りの英語を話した方がよい(西山)ともいえるのである。

この延長線上に高度なピジョン・イングリッシュであるイングラント(小田)、世界語としての別の言語ともいべき英語であるイングリック(鈴木)、そして、日本語の影響を色濃くもった英語であるジャパリッシュ(渡辺)の提唱がなされているのである。さらに論を進めれば、日本人の英語が生れなければ、永遠に民族英語から自由になれない(中村)という自方もできるし、日本人訛りから脱却すれば、話し手が自己のアイデンティティを喪失する(小川)という見方もある。

教育学的には、日本語の音声を代用音として使う段階を設けて、徐々に英語的な発音ができるように指導すればよい(比嘉)という提言を真剣に受け止めなければならない。国際英語として立派に通用するようなジャパニーズ・イングリッシュ(安藤)に対する最低かつ最高の条件は、コミュニケーションが円滑に行なわれる(宇都宮)という点にかかっているのである。今

(4) 白石明彦氏 1991年11月19日

(5) 「アジアの英語」 p 291-291

目的な国際交流においては、英語文化への同化は起らないのが通常である(遠山)ので、英米文化に縛られない、日本人として主体性のある英語で自己表現できるような英語教育(中山)を志向すべきであろう。」

以上 Japanese English に対する概念の流れからも日本人自身が意識改革をする必要がある。Japanese English は Broken English ではないという。子供は誰でも親について、又ある時期学校に通って勉強する。それからいずれ親元を離れて独立していかなければならない。

Japanese English も最初は文法(音韻論、形態論、統語論)を修め、その後は Japanese English の確立を目指さないと国際英語を創造する国際的土俵に立てないのである。その過程において日本人はコミュニケーションが円滑に行なわれることを目標に(intelligible)通じる英語を目指せばよいのである。Japanese English は英語の文法を核として誤答分析(Error Analysis)の研究より日本語の影響を受けて、学習上かなり問題となる箇所を取り上げて、研究、修正、整理、簡素化してゆくべきである。例えば、冠詞の使い方、三人称動詞の変化、間接疑問文内での主語・述語の語順などである。しかし音声面は、あまり英米語から逸脱すべきではない。英米語自体の音声にもかなり幅のあるものもあるので、理解できうる許容範囲内にとどまるべきである。幸い日本では第3世界のように第2言語としての英語を話す必要はない。しかし、日本人の中に一人でも日本語の解らない人間がいれば、我々は Japanese English を話さなければならない。現にそうしているし、日本人同士でも最近の湾岸戦争では英語でコミュニケーションしなければならなかった状況がおこった。いずれにしても我々は Japanese English を大いに使用して外国に色々な事を発信して行かなければならないのである。そのためにも母体となる英語に出来るだけ多くの日本語の影響を与えておくのは将来国際語創造においても戦略となりえるのである。また、世界の人々は国際語を考案する際、地域主義 regionalism 対世界的関与主義 globalism の両輪ですくなくとも行くべきであるという観点から出発すべきである。

VI. おわりに

昨今、金融界はもとより様々な分野でボーダレス時代の到来などと言われるようになった。当然情報が瞬時に衛星放送を通して世界中を駆けめぐり、国際間での共同作業が日増しに必要なになっている。そこで国際間コミュニケーションのための補助言語として英語の標準化が求められ、進んでいる。英語を第2言語とするアジアの地域では、国内の生活言語としての英語と、又

国外とのコミュニケーションを目的とする、すなわち国際英語との両方を話すことが必要になってきている。これは関西人が関西弁と標準日本語である東京弁を話す bilingualism となんらかわるところがない。

日本の場合は国内の生活言語として英語は必要ないのであるから主に国外とのコミュニケーションを円滑にする道具として使いやすいものにするのである。すでに日本は日本語・英語のバイリンガル時代に入っているのである。そこで現在ある英語に出来るだけ日本の影響を与えておくことが得策である。その方法として日本人がどんどん現在習得している英語、すなわち Japanese English を通して日本のあらゆる分野の事を発信することである。そのために日本人は国際的場面で自己表現できる訓練をつまなければならないのである。

国際語としての標準英語はその創造過程において地域主義——その地域の英語はその地域の、国の独特のものであり、文化であるので、十分尊重しつつ、地球市民の視点より常に国際理解・国際共存を念頭においた世界的関与主義 globalism の方向で共通項を見出して各国の英語からほぼ等距離の基準を決定して行くべきである。

参 考 文 献

- Passin, H. (1982) *JAPANESE AND THE JAPANESE*, The Simul Press.
- Hanvey, R. G. (1979) "Cross-Cultural Awareness" *TOWARD INTERNATIONALISM*, Newbury House.
- Freeborn, D., French, P., Langford, D. (1986) *Varieties of English*, MacMillan.
- 本名信行編 (1990) 『アジアの英語』, くろしお出版.
- Cheshire, J. (1991) *ENGLISH AROUND THE WORLD*, Cambridge Univ. Press.
- 高部義信 (1978) 『アメリカ新語辞典』, 研究社出版.
- Todd, L. (1990) *Pidgins and Creoles*, Routledge.
- Crystal, David (1985) "How Many Million?-The Statistics of English Today." *English Today* No. 1, Cambridge Univ. Press.
- McArthur, Tom (1987) "The English Languages?" *English Today* No. 11, Cambridge Univ. Press.